

**山鳥坂ダム・鹿野川ダム環境検討委員会**  
**第6回動植物の保全に関する専門部会**  
**議事概要**

日時 平成25年12月10日 13:00～14:30  
会場 山鳥坂ダム工事事務所 会議室  
出席者 愛媛大学 農学部 教授 酒井教授  
愛媛大学大学院理工学研究科 准教授 三宅教授  
日本貝類学会 会員 石川氏

**1. 山鳥坂ダムにおける環境影響評価および保全措置の経緯**  
(特になし)

**2. 山鳥坂ダム現地調査結果の概要**

**2.1 調査全般**

- ・ 過年度調査で確認されているが、今年度調査で確認されなかった調査対象種が多い。確認されなかった要因が環境の変化によるものか、その他の要因によるものか不明である。要因を検討しておくこと。

**2.2 各種**

**①ミヤマサナエ**

- ・ ミヤマサナエは、比較的最近まで確認されていたが、平成25年度のこれまでの調査で確認されなかった。その要因を検討すること。
- ・ ミヤマサナエは、上流で産卵し、移動しながら生息して、下流で羽化する。万が一、上流域で小さいもの、下流域で大きいものが数多く確認されれば、ダムによる分断の影響が懸念される。その場合、新たな保全措置を検討する必要性が生じる。
- ・ 今後の調査では、大きさを記録すること。正確な齢数を記録する必要はないが、全長の記録か、大中小の記録等を行うこと。小さいサイズのものは、確認するのが難しいが、目の細かい網を用いるなどして、可能な限り努めること。

**②アイヌハンミョウ**

- ・ アイヌハンミョウについては、ダム下流の2地点のみの確認で、水位変動が生じる場所である。次年度に調査をするのであれば、水位変動の生じにくい肱川本流を含めて重点的に行うこと。
- ・ アイヌハンミョウについては、5月調査では、最盛期を過ぎていたのかもしれない。次年度は、もう少し早く行うこと。
- ・ アイヌハンミョウは、愛媛県では広く分布している種である。

### ③マシジミ

- ・ マシジミが過年度調査で13地点確認されていたが、平成25年度のこれまでの調査では確認されていないため、要因が懸念される。

### ④ハブタエヒラマキガイ

- ・ ハブタエヒラマキガイは、過年度調査で76個体が確認されているが、平成25年度のこれまでの調査では確認されなかった。本種は、持ち込まれたものと推定される。

## 3. 山鳥坂ダムにおける動物に関する保全措置の検討

### 3.1 保全措置対象種

- ・ オモゴミズギワカメムシは保全措置対象種から外すということで問題ない。

### 3.2 環境保全区域の設定

- ・ 環境保全区域とは、一般的な用語ではなく、本ダムで独自に使う名称であれば、どのようなもので、何を目指しているのか、将来どのようにするのか、明確にしなければならない。環境保全区域とは、指定された区間において、人為的な改変が禁止されるというイメージを持つ。
- ・ 区間Aは貯水池になる場所で、環境保全区域にはならないと考えられる。区間Bはダムによる影響がないので、現状のまま維持されると考えられる。アオサナエの生息域は、上流側にはわずかな区間しか残らないため、影響があるとすれば、貯水池による分断と考えられる。
- ・ 区間Aでの影響について、出水時の攪乱と貯水による攪乱は、性質が異なるので、慎重になるべきだと考える。
- ・ 環境保全区域を設定するのであれば、保全措置対象種のみではなく、様々な重要種が生息できるように周辺の森林や植生を含めて保全すべきである。多様な生物の生息環境を創出するという方針にしていきたい。
- ・ スギ植林と落葉樹林では生息できる生物種の数が全く異なる。環境保全区域周辺の河川沿いのスギ植林を落葉樹林に転換するようなことも保全措置になるだろう。

### 3.3 環境への配慮（陸産貝類）

- ・ サドタカキビはイヌビワの木に登っているのをよく見る。落葉樹ならどれでもいいわけでない。イヌビワは陸産貝類に好まれる種である。
- ・ 陸産貝類を移動する場所として類似した環境を探すのは難しい。湿度が一番重要であり、日当たりがよく、乾燥するような場所は適さない。谷筋などの湿った環境がいい。イヌビワを移植してやることも重要かもしれない。

### 3.4 今後の調査

- ほとんどの種で生息環境は広く分布していると記載されているが、生息環境が分布していても、生息が確認されていない。生息環境が維持されていても、生息が維持されていることにはならない。その生息環境に実際に生息していることを確認しておくことが望ましい。
- 保全措置対象種とする必要はないが、昆虫のどの種についても、モニタリングは必要と考える。
- キベリマメゲンゴロウとアイヌハンミョウは来年度に調査を実施することで問題ない。キベリマメゲンゴロウは過年度で一個体だけしか確認されておらず、生息している可能性は低いが見つけにくい種であるので、調査を行った方がいいと思われる。

以 上